

## アジアレポート Asian Reports

# 序文にかえて

順天堂大学腎臓内科  
富野康日己

この度、本誌にアジアレポートのコーナーが作られることになり、私がAINF(Asian Integrated Nephrology Forum)企画委員長を仰せつかっていることから序文を依頼されました。AINFが出来た経緯と現在までの活動状況を述べ、序文にかえたいと思います。当企画委員会は、黒川清前理事長の「アジアに目を向けよう」との方針から渉外企画委員会のなかに作られ、浅野泰現理事長に引き継がれました。委員は、伊藤貞嘉(副委員長：東北大学)、今井圓裕(大阪大学)、今井裕一(愛知医科大学)、遠藤正之(東海大学)、山崎康司(岡山大学)、宮田敏男(東海大学)、渡辺毅(福島県立医科大学)、海津嘉蔵(産業医科大学)、内田俊也(帝京大学)、柏原直樹(川崎医科大学)–順不同–の各先生です。

現在、当委員会では5つの企画を進行中です。第1に、AINFはアジア諸国へ出向いて腎臓病学の基礎と臨床の指導・普及に努めるもので、日腎と関連各社の協賛並びに各国からの招聘で運営しています。平成13年からこれまで計21回の講演会を開催いたしました。第2にJSN-Baxter奨学プログラムがあります。これまで短期留学コース(6カ月)では2名が、技術指導コース(2カ月)では3名がわが国で研修を受けています。また、日本腎臓学会学術総会で選考された若手腎臓病医をアジアで開催される学会に派遣するコースでは、4名が出席し立派な発表を行っています。第3のJSN-Nipro奨学プログラムは、タイ、マレーシア、インドネシア、ベトナムから3カ月間東京と大阪で留学生を受け入れるコースで、これまで3名が研修されています。ご協力いただきました施設の皆様に厚く御礼申し上げます。今後とも、多くの先生方に留学生の受け入れにご協力いただきたく、お願い申し上げます。また、1年ごとに交代で主催する日韓腎フォーラム(協賛：ノバルティス社、テルモ社)と日中腎カンファランス(協賛：キリン社)は、日本と韓国・中国の腎臓病医の連携を深め共に研鑽しようとの目的で行われるもので、前者は去る3月21日に開催されました。後者は、本年10月18日東京都市センターで開催する予定です。毎年テーマを変えて開催いたしますので、ご希望のコースに是非ご参加いただきたいと思います。詳細は、私までご一報下されば幸いです(Tel&Fax:03-5802-1064, e-mail:yasu@med.juntendo.ac.jp)。最近、私達をとりまく経済状況は厳しいものがありますので、あまり無理な運営はせずに、実のあるアジア諸国の腎臓病学の発展に貢献したいと考えております。

今後、このコーナーでは会員の皆様にアジア諸国の腎臓病学の現状やAINFの活動状況を逐次お伝えしていきたいと考えております。皆様のご協力を重ねてお願い申し上げます。

# 第1回韓日腎フォーラム開催報告

順天堂大学腎臓内科

富野康日己

(日本腎臓学会 AINF 企画委員長)

第1回韓日腎フォーラムが去る3月21日(金)韓国済州島にて開催されました。2001年に韓国慶州市で開催された第9回国際IgA腎症シンポジウム(会長: Prof. Myung Jae Kim)のFarewell Partyの席上で、当時日本腎臓学会理事長であった黒川清先生と韓国腎臓学会理事長であったHan Dae Suk先生が意気投合され、両国で何か研究会ができないかとの話題が出されました。その折、同席した私がAINF企画委員長であることからこの課題を受け継ぐこととなりました。両前理事長の思いは、現理事長浅野泰先生(自治医科大学教授)とYoon Kyun IL先生(梨花女子大学校医科大学教授)に引き継がれました。両国委員会で相談の結果、第1回のテーマは、「Treatment of complications in dialysis patients」となりました。AINF企画委員会では、韓日腎フォーラム小委員会を設置しアンケート調査の結果、下条文武(新潟大学教授)、斎藤明(東海大学教授)、秋澤忠男(和歌山県立医科大学教授)、深川雅史(神戸大学助教授)の各先生に発表をお願いすることに致しました。あいにく、黒川清前理事長(東海大学教授)にはご参加いただけませんでした。浅野泰理事長と私(日本側事務局)も参加させていただきました。開会時に、私が黒川先生のご挨拶

文を代読致しました。総勢45名というごちんまりとした会でありましたが、一人30分という発表時間であったこともあり、両国の腎臓病医から活発な質問がだされ、大変有意義な会となりました。特に、日本でなぜ長期間の透析療法が可能になっているのか、韓国側の最大の関心事でした。韓国では、腎移植とCAPDが日本よりもはるかに多いことが報告されました。また、3日間の滞在でしたが、Partyなどを通じこれまで関わりの少なかった両学会の親交を深めるうえでも有意義であったと感じました。開催にあたり、日本側はノバルティス社とテルモ社、韓国側はノバルティス社とバクスター社のご協力をいただきましたこと、心から厚く御礼申し上げます。

来年度は、日本側が担当で第2回日韓腎フォーラムを2004年3月20日(土)に予定しております。テーマその他は、AINF企画委員会等で検討致しますが、日本からの参加は50~60名程度のsemi-closedの会になるだろうと思います。予算に限りがあり、多くの会員の先生方をお招きすることはできませんが、ご興味のあるテーマでありましたら、是非ご参加いただきたいと思います。なお、このフォーラムは毎年テーマを変えながら計6回行うことしております。

## 第9回 アジア太平洋腎臓会議 参加報告

愛知医科大学医学部内科学講座（腎臓・膠原病内科）

今井 裕一

2003年2月16日から20日まで、タイのパタヤで第9回アジア太平洋腎臓会議が開催された。成田からバンコクまで約7時間の飛行であり、ヨーロッパやアメリカに比べれば、大変近い距離であることが実感できた。飛行機を降りるときに機長が、「タイにはhot, hotter, hottestという3つの季節があります。現在の気候はhotに相当します。それではよい旅を！」といていたことは飛行機を降りてすぐに理解できた。2月のタイは、日中の気温35°C、夜の気温も20°C台と日本の真夏並みの天気であった。

バンコク近郊の空港からリゾート地であるパタヤまでバスで約3時間かかったが、エメラルド・グリーンの海を見た瞬間に旅の疲れも忘れた。

16日の午前中から参加登録が開始された。抄録を受け取りポスター発表の時間を確認すると私自身の発表がないことが判明した。直ちに学会事務担当者に相談したところ、演題登録のパターンが、ホームページとeメール（＋ファックス）の2本立てであったことが、災いの原因のようであった。ホームページからの登録がほとんどうまくいかなかったらしい。

「まあ、学会ではよくあることですから、ポスターを貼るスペースを調整していただければそれでいいです。できれば、18日の37番の次、38番にいただければ幸いです。」

「残念ですが、それはできません。」

「どうしてですか？」

「実は、あなたと同じような方がいますので38番は予約済みですので、39番なら可能です。」これは、タイ式の最高のユーモアかもしれないと思いながら

担当者と固く握手した。

Continuing Medical Education (CME)が12コマ用意されていて、シラバスも渡された。Dr Halperinの電解質・酸塩基平衡は、大変わかりやすかった。しかも上手に教えていた。3コマを彼が講演していた。CAPDについては、香港のPrince of Wales病院のPhilip Liが彼らのデータを提示しながら解説していた。香港では透析導入の80%がCAPDであること、さらに200名程度のrandomized controlled trialを実施し、次々と国際雑誌の発表している姿に敬服した。わが国では、CAPD患者は透析患者の約5%しかいないのであるが、総数8,000人以上という数字は、香港の2,800人をはるかに超えているのである。しかしRCTのデータが出ないのはなぜだろうか？深く反省した次第である。一方、コロラド大学のLaurence ChanのCAPDの新しい溶液についての講演も拝聴したが、Polyglucoseの紹介が主体であり、残念ながらDr Liほどの迫力を感じることはできなかった。

日本人が80名ほど参加していた。ポスター、口演、シンポジウムでもそれぞれ存在感があった。

19日の夕方にはBanquet（懇親会）が行われた。中華料理でありテーブルがあらかじめ指定された。私はたまたま、イスラエルのご夫婦、ベトナムのBach Mai Hospitalの先生方と一緒に席になった。ベトナムの先生といろいろ話をするうちに、JICAからの派遣で国立国際医療センターの斎間先生が、これまで何回か医療指導に行っている病院であることが判明した。昨年になるが、ある日突然、ベトナムにいる斎間先生からメールが届き、そこで「ネフローゼの妊婦がいるがどうしようか？」という相談であったの

だが、なぜ彼がベトナムにいるのかを聞いて驚いた。その後、私が作成した腎生検のビデオをベトナムに送ったのだが、偶然に同席することになりその因縁に驚いた(ベトナムについての詳細は、いずれ齋間先生から報告があることと思います)。

食事の間に、タイの舞踊のアトラクションがあり、APCNの歴史の解説があった。第1回開催国が日本であり、大島研三先生が会長であった。第2回がオーストラリアで行われ、第3回がフィリピンで開催された。このあたりまでは日本人の参加が多かったようであ

るが、その後、インド、中国を回るうちに日本人の参加者が20名前後まで減少してきていた。今回は80名ほどの日本からの参加者があり、アジア人同士また日本人同士でも親交が深められた。次回は、2年後、シンガポールで国際腎臓会議(ICN)とAPCNが共同で開催されること、しかもAPCNの会長が東海大学の堺 秀人教授に決定したこともあり、また参加することになっている。

皆さん、一緒に行きましょう。



学会会場入口にて



バンコク市内の風景

# Asian Pacific Congress of Nephrology 2003 参加報告

医療法人健友会 本間病院内科

小山 雄太

2月16日～20日にタイのパタヤで開催された第9回アジア太平洋腎臓学会議に参加した。国際学会参加は初めてであり、出発前は不安と緊張がいっぱいであったが、今回は愛知医科大学の今井裕一先生にコバンザメよろしくくっついて行く形だったので、大船に乗った気になっていた。7時間弱のフライトでバンコク国際空港に着いたが、夕方にも関わらず気温は33℃と暑く、独特の匂いと雰囲気はただよっていた。空港からパタヤまではバスでの移動(2時間半)であった。バンコク市内は所々に高層ビルが林立しており、その合間に木々や民家が密集し、寺院などの建築物も混じっているというごちゃ混ぜ状態で、それらの建物がきちんと区画されていない姿が印象的であった。7階建ての立派なデパートの隣はスラム街だったり、全体的に新旧、貧富すべてが混在しているようだった。バスにゆられてホテルに着いたのは20時半くらいであった。宿泊することになったホテルはパタヤビーチの南側にあるRoyal Criff Beach Resortというホテル群の一つで、今回の学会場と隣り合わせになっていた。部屋は一人で泊まるのもったいないくらいの立派なもので、ベランダからは海が一望できるようになっていた。テレビではタイの放送のみならず日米英独仏からイラン(だったと思う)の放送まで入っておりバラエティーに富んでいた。個人的には仮面ライダーやポケモン、はては松嶋菜々子までがタイ語でしゃべっているのが楽しかった。

2月16日の学会初日にはまず参加登録をしたのだが、実は私のところにはポスター発表が何日で、ポ

スター番号が何番で、といったインフォメーションが事前に全く届いていなかった。そのため本当に学会が開催されるのかが不安で、タイまで行ってはみたが学会はやってません、なんてことになったらどうしよう、などと考える始末だったので、実際に学会場に入って正直ほっとした。参加登録をしたら自分の名前があったので第一関門はクリアしたが、次は自分の演題がプログラムに載っているかどうかは第二関門である。著者索引がなかったので順繰りにページをめくっていくと2月18日のポスターセッションに自分の演題があり、これで次なる関門もクリア。ところが同行した今井先生も自分のところにinformationが何も来ていなかったと仰っていたのをふと思いだし、もう一度プログラムをめくってみると今井先生の演題が載っていなかった。

同日の夕方開かれたOpening ceremonyはHer Royal Highness Princess Galyani Vadhana(プミポン国王の姉だそうです)が出席して厳かに行われ、民族音楽や民族舞踊を堪能させていただいた。

学会中は、CME lectures, symposium, free communicationなどの講演を聴講した。ポスターセッションは2月17日～19日の3日間で行われていたが、1日40演題強だったので合計120演題ということになり、全体的に演題数が少ない印象であった。しかしその中でも日本からの演題が多く、質問も飛び交っていた。なお今回の学会には80人くらいのドクターが日本から参加されていたようで、学会期間中は多くの先生がたをお見かけした。富野康日己先生はAPCNのcouncilorや advisory boardも務め、学会でも

symposiumでIgA腎症に関連した講演をしておられた。また山辺英彰先生はHCV腎症17例のreviewを発表しておられた。米沢市立病院泌尿器科の高岩正至先生はポスター発表を3演題も出しておられ、さらにfree communicationでは積極的に質問をし、相変わらずバイタリティが漲っておられ感服した。

2月19日に行われた学会参加者の夕食会(Banquet)では11人がけのテーブルが80近く並び、盛況であった。同じテーブルにはイスラエルからの医師夫婦、ベトナム・バックマイ病院の透析担当医師などが座っていた。ノンアルコールだったのが少々寂しかったが、和やかな夕食となった。バックマイ病院といえば国立国際医療センターの斉間先生がJICAからの派遣で透析の指導のために行っておられた病院だということを知っていたので、「私はあなたの病院を知

っています」ということになり、ひとしきりその話題になった。やはり今後は腎疾患や透析医療において日本がアジア各国に対してもっと積極的に貢献していくべきではないだろうか。日本腎臓学会主導あるいはボランティアによって医療資源の供給や医療指導のコーディネートを行い、アジア各国と連携をとることが大切であると感じた。

Banquetの席上でAPCNのこれまでの経緯が紹介されたあと、次回の第10回APCNは2年後、シンガポールにおいて国際腎臓学会(ISN)と合同で開催されるとアナウンスされていた。日本のNephrologistsが多数この学会に参加することが、ひいてはアジア各国の腎疾患治療の進歩に少しでも貢献することにつながるのではないかと思う。私も次回また頑張って参加したいと考えている。